

蟹泡錄

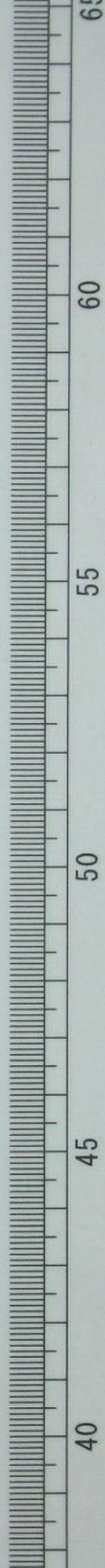
五

特別

14

1919

136



○予凡と早稲の種子の某を主を養ふらんを大徳の  
 たりん人ありてす。曰ある。而して精作の如く此の奉  
 を致し、快く義指を為すとのと詢を。辰  
 星を一般、多くと門前を謝絶せん、あはれ  
 思ふ量をあること。或許を、吾んを人の門を  
 叩く毎に思ひ、吾んを門を、吾んを  
 多くを需むる。吾んを吾んを吾んを吾んを  
 と、此れを思ひ、而して笑ふ。吾んを吾んを  
 此れを吾んを吾んを吾んを吾んを吾んを  
 此れを吾んを吾んを吾んを吾んを吾んを

を而て来る癖く能くさすべし  
 のこのころ神に武蔵山流を結ぶ彼れが  
 鐘淵紡績が杖支店長とて、福山其の志  
 義塾生もるるを口懸のともせしむるまじ  
 非れん者なりしことあるは、此の経路  
 ありし曰く貴下の心とき位地ある人なりし  
 のをも親らせしむ。諸忍耐謀の思ひ老るる  
 是も、麻土のそえま基ををるる物なり  
 根柢の人の魂をの人の後け、これを  
 月夕人を流してし、而して此の根柢の行  
 動をふるまふべし、高は其の氣根柢の通

東洋風

の世の世を解するは、貴下の御  
 耐忍の心ありし地の心なりしと  
 ○この世は、俗に云く、後世に此の世の世  
 務を掌りし、いふと、清在久しき、清人  
 の俗化を急ぐべし、流人や俗の俗なるべし  
 事、をゆくは、俗人の前、叩頭せんとする  
 可し、如く、吾んを不知不識、改め、中世  
 の後、臨むべし、んやあるべし、此の世、行本  
 中、よき種子を出し、後世、六氣、奇を  
 大し、俗氣を洗滌すべし、補すべし、とて  
 ず、清山、今心の流をたると、所、まゝ、私



死を上り及るくわは臣るく亦四のりうし  
従然として天地を以て其れとす南面王の  
業と云ふこと能うか

存子の死を解する也世し而も存子の目之れを況  
く存子の之を出入るるあつても生死を一視し神  
心のあを圓うんとする外なきは涅槃又生死固  
と一体なりと彼れの名をまをきて之の氣着するの  
の非るるを論トて曰く

生も死の徒、死は生の故なり人の生は氣の聚  
るなり聚るは生と云ふ散るは死と云ふ死  
し生を徒と云ふは又何をの事入ん

万物一なり其美と云ふものこゝろを非なりと  
う其美を石のこゝろを其れと云ふ其れ  
後化して非なりと云ふは非なり後化して  
其れと云ふある天なりしも一氣のなり聖人  
ある一と云ふが

と、物理の解、泰西のありのありのあり又  
之れを美するありと云ふ、存子の死も也世し  
こゝと云ふは存子其の事あを其れや笑せせり  
うりうりか笑然しと云ふを説いて歌のり喜  
子行て之を答ふ存子曰く

始の死も我獨り能く懐くと云ふ



とらふ事、吾等并其皇位とせんや何とやうに之を  
みかくんとせんか、弟子も之れを承へて、さうして鳥  
の族夫を合ひんとせんか、とて、子とて、  
可

ト云つても鳥の族夫を合ひんとせんか、とて、  
蟻の合ひとせんか、故を奪つて之れを承へ、何とせん

偏る事や

と、此を解して教ふる也と云ふ事、其の鳥の族夫の  
合ひとせんか、蟻の合ひとせんか、  
奇しくせん教ふる  
事の方法は、こゝきん、わんか、おん、  
棺槨を以て、  
すゝと、  
要らんや

○吾子を生るの理を説き死を免るること、吾を治る  
事、知れども、決して、  
事ある事、命に義の人は、  
長生の法を説く事、  
例の事、  
事、  
○庖丁あるに、牛を切らう王其の技を  
て、  
可

臣の好む事と道と、  
の牛を解く時、  
が三年の事、  
牛の骨格構造の所在、

筋肉の性質位置を熟知せらるる臣の心眼中  
一切の牛尺く解剖せらるるを爲め  
牛あるを思ふるも、今や臣精神の目を  
以て之を肉眼を用ひず、骨と肉と連る  
るに従ひて刀をすくめ、骨と骨との隙を自ら  
存する大なる隙に刀を用ひ、骨肉を統べ  
る堅き部を骨の堅き部の著き決し  
之れを刀を用ひて通ふことなし、良庖ハ歳に  
刀を更ふ、其筋肉の硬さを割けば、拙庖  
は月々刀を更ふ、之れ大骨を並ひて斬る  
或は之れを折らん、今臣の刀は十九年

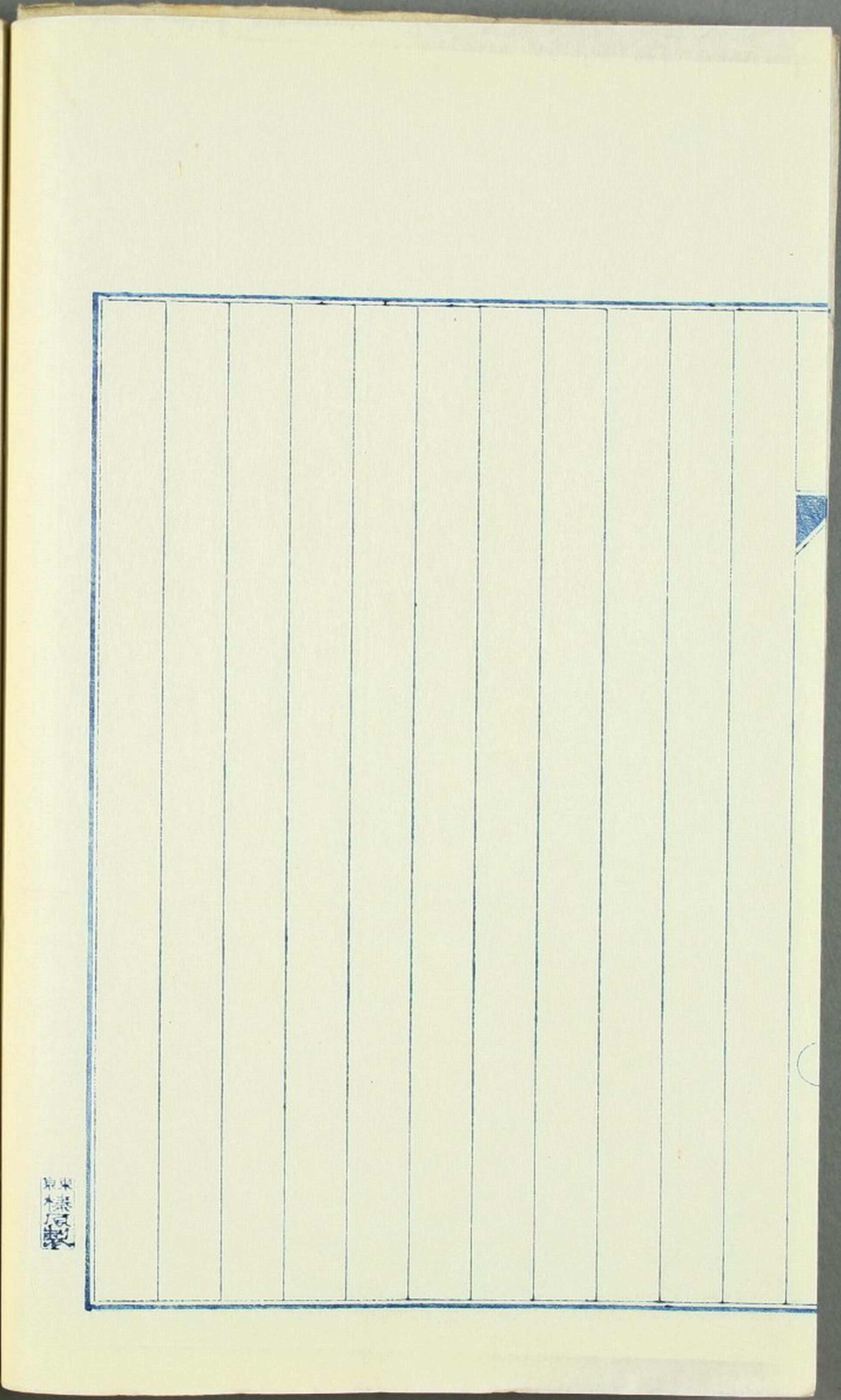
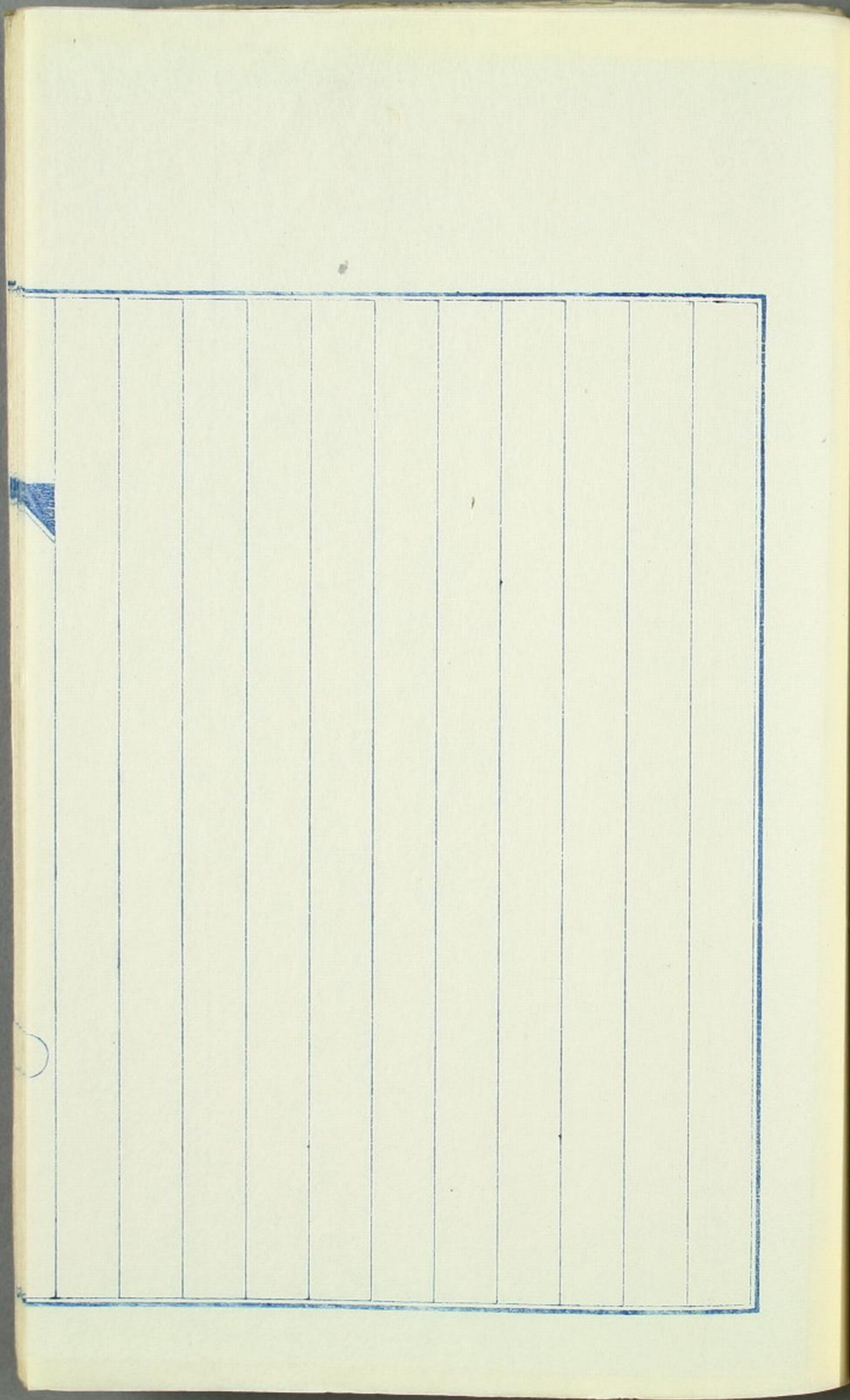
牛を割くこと教す、而して刀又新し、  
出たるを、彼の牛の骨と骨との隙に刀を  
おし隙を通し、而して刀又ハ厚きことなし、厚  
きことなきものを以て隙に入る、扱ふ手して  
又をおひし、而して刀又ハ厚きことなし、十九  
年、刀又新し、出づる、其きことなし  
然りと雖も筋肉盤錯のたゞなるを、其  
注を、其きを、見、悚然として、戒の、視あり  
止まらば、行あり、遂く、刀を動かさざること甚難  
く、礫然として、解剖し終るや、土の地、  
す、其し、刀を提げ、之れを、之れを、之れを、





列子終身無妻子の如き死人を謂ふは他人と云ふ事の  
言を敷衍して結論する曰く夫れ死人と言ふは他人  
と云ふ事生人と行人と云ふ行りて歸る事を云ふは  
家をとらふ事一人家を失つば一世之を非ぬ天  
下家を失つば非ざるを云ふ事一人世を失ふ事を  
云ふ事親を離れ父母を去るを云ふ事四方を遊ばして歸  
らざる事を云ふ事之を謂ふは狂者の人と為さ  
んと云ふ事也此の如く云ふ事狂者の言と  
云ふ事也此の如く云ふ事

Blank lined page for writing.



以下全て  
白紙

明治三十六年  
二月下浣大坂  
客寓中春城